

至秋而枯、其根至潔白、

〔段注說文解字〕艸下菅茅也、詩白華既溫爲菅、又以白茅收束之、菅別於茅、野菅又別於菅也、从艸官聲、

古頤切、十四部

〔書言字考節用集〕六生植菅陸機云、似茅同

〔日本釋名〕下菅スゲ すがくしとは清き心也、祓の具に用て清き物なり、一説すぐ也、葉もなくてすぐにたつ草也、

〔東雅草十五〕卉菅スゲ 茅チ 萱カヤ 倭名鈔に菅はスゲ、茅はチ、萱はカヤといふと註せり、蘇頌圖經、李東壁本草等に據るに、彼にしては茅といひ菅といふ異なる物とも見えず、白茅は詩に云ふ菅茅也とも、菅また茅類也とも、又茅に數種あり、夏花さくを茅とし、秋花さくを菅とすとも見えたり、此にして菅讀てスゲといふ者も、茅の類也、圖經註に茅蒲スゲと見えしも、詩疏に臺草といふもの、一種こ、にして笠に縫ふもの、漢もまた然り、一種莎といふもの、此にしては山菅などいひて、蓑となせしものと見えたる、但し麥門冬讀てヤマスゲといふものとは、其名同じけれども、其物は同じからず、万葉集抄にスゲとはスゲ也、衆草は枝葉ありて、をさなきより生ひしげるもあるに、菅はすぐにたてる物なりといふなり、たゞ其細く立てるをいふ事、芒をス、キといふが如くなりとぞ聞ゆる、

〔倭訓栞〕前編十二すげ 菅をよむはすがと通す、すがくしき意、歌に白菅、岩小菅などよめり、祓中にも用ゐものはみそぎのそぎとすげと同じ語なるをもて也、穢をはらひ放るの名とす、住吉にて六月祓を菅の祓と稱すといへり、新撰字鏡に蓼も訓せり、黃すげは仙茅也、日光黃菅あり、はますげは莎草也、姫すげは地楊梅也、又一本菅あり、

〔大和本草八〕水草菅 本邦昔ヨリ菅ノ字ヲスゲトヨメリ、スゲハ水草葉ニカドアリテ、香附子ノ葉